

研究報告

北海道の特別支援教育における障がい者乗馬の活用に関する研究 —知的障がい教育及び肢体不自由教育の実践について—

青木 佑斗¹⁾ 神田 英治²⁾

1) 景盛学園・宮ノ丘幼稚園 2) 北翔大学教育文化学部教育学科

抄 録

本研究では、現在、日本各地で展開されている「障がい者乗馬」について、その実態を明らかにするとともに、北海道の特別支援学校における教育課程の中で「乗馬体験活動」をどのように実施しているかの実態調査を行い、「特別支援教育」と「障がい者乗馬」が関わる上での課題を明らかにし、相互に関わりをもつためにどのような在り方があるのかを考察・検討した。

キーワード：特別支援教育、障がい者乗馬、乗馬体験活動、乗馬教育

I. 研究の背景と目的

乗馬は、その活動を通して様々な効果を期待することができる。馬に乗って歩くことで、身体が前後・左右・上下に自然と揺れ、バランスを保持しようとすることで、筋肉の発達や平衡感覚が養われ、姿勢が矯正される。また、その揺れと馬の暖かい体温による適度の緊張とリラックス効果も期待でき、馬という大きな動物をコントロールしているという達成感や自信をもつことができる(長谷川 2006¹⁵⁾)。そして、馬を上手にコントロールすることが目標ではなく、その活動を通して生活の質(QOL)の向上を最大の目的としている。

イギリスでは、「障がい者乗馬」に対して世界的に長い歴史があり、1900年代から学校でも日常的に乗馬が取り入れられている。現在の日本では、「日本障害者乗馬協会(RDA: Japan Riding Association for the Disabled)」などを中心に、この活動が各所で展開されている。

「障がい者乗馬」は、様々な効果が期待できると同時に危険性も伴っている。その一つとして、馬という動物の特性がある。馬は、肉食動物から走るという方法で、生き残ってきた草食動物である。そのため、視野がとても広く約330~350度見えていると言われていたが、真後ろが死角になっている(Colin Vogel 2005¹⁰⁾)。そのため、不用意に後ろから近づいたり、大声などの驚かすような行為をすれば、「蹴る」という防衛行動に出る。このことは、馬と関わる上では、最低限理解していなければ

ならないことである。この他にも、馬と関わる上で厳守しなければならないルールがいくつかある。厳守すべきことは、「障がい者乗馬」を行う側の人間だけではなく、騎乗者も同じである。そのルールを正しく伝えるためには、馬という動物自身を理解する必要がある。騎乗者が脅かされる危険に対して、予防的に行動ができなければならない。更に、通常の乗馬との方法の違いについても、正しく理解して接することも必要である。

本研究では、「障がい者乗馬」について、実際に行っている現場に入り、馬やそこに携わる人たちと関わりながら、その実態を明らかにするとともに、実践事例の取積に努めたい。また、今後の日本において「障がい者乗馬」と特別支援教育との関わりについても検討していきたい。

乗馬は、老若男女、体力の差や障がいの有無にかかわらず全ての人が楽しむことができるスポーツである(新井 2013²⁾)。障がいがある人もない人も一緒になって活動できるということは、その喜びや楽しさを共感・共有することができるということであり、非常に大きな魅力である。今後の特別支援教育において、「乗馬」という体験的活動(以下、「乗馬体験活動」という)は、心身機能の向上の可能性を見出すことができ、非常に教育的意義のあるものになると考えられる。また、ノーマライゼーションの理念にある障がいという隔たりをなくするという意味で、非常に大きな役割を担うことになると考えている。

「乗馬療法」は、その活動を通して、バランス・姿勢の改善や筋緊張の緩和などの「身体的効果」、うつ状態

の改善や集中力の強化・自信や意欲の向上などの「心理的効果」、他者との関わりや地域のつながりの強化・コミュニケーション能力の向上などの「社会的効果」の三つの効果が期待できることが知られている（川添・山川ら2010⁴⁾）。すなわち、医療・保健サービスの専門家が馬を通して行う治療である。この医療的行為は、イギリスを中心に障がい者の社会参加を主な目的として、レクリエーションやスポーツを通じて行われてきた。日本では、医療的行為として認められておらず、医学的リハビリテーションにおける乗馬を実施しているところは、皆無の状況である。

しかし、ドイツ語圏を中心とした西欧諸国では、医療、教育、心理対応等を専門領域とした乗馬を活用した「治療的乗馬」として展開されている（滝坂 2011¹³⁾）。現在の日本では、治療のみを目的とするのではなく、馬との関わりを通じて障がい者の人々の自立性を高め、活動的な生活へと導かれていくような、生活の質（QOL）の向上を目的とした「障がい者乗馬」を行っているところが多数存在する。馬には、人が乗ることができるという最大の特徴があり、その活動を通して馬との一体感を味わうことができ、自分で自由に移動することができるということも大きな魅力である。

脳性麻痺を患い、歩くことができなかつた人が、乗馬を通して座位が安定し、自分で歩くことができるまでに回復した事例もある。このように「障がい者乗馬」は、とても幅広い障がい分野で、治療効果を発揮することができる。しかし、日本では、この活動を特別支援学校と連携して教育課程に位置づけて指導するということが、ほとんどなされていないと思われる。また、相互に連携するにあたって、様々な問題や課題があるものと考えられる。それらの問題や課題と向き合いながら、一つ一つ改善していき、「障がい者乗馬」を特別支援教育に活かすことができれば、様々な障がいのある人々にとって、心身機能の向上の可能性を見出すことができ、教育的にも非常に効果があり、意義あるものになると考えられる。

北海道は、日本有数の馬産地であるという特性を生かして、北海道の特別支援学校における「乗馬体験活動」の、教育的活用に関する教育課程の位置づけについて実態調査を行い、「特別支援教育」と「障がい者乗馬」が関わる上での問題や課題を明らかにしていきたい。また、それらの相互に関わりをもつためには、どのような在り方があるのかを検討・考察する。

Ⅱ. 「障がい者乗馬」について

1. 「障がい者乗馬」の意義

「障がい者乗馬」の歴史は、紀元前5世紀のギリシャにまで遡る。戦争で負傷した兵士の身体回復あるいは気分高揚の目的のために、馬に乗せるという事が行われおり、馬を使った療法の始まりとも言われている。実際に、治療効果を見出したという記録も残っている。この時代の社会背景には、馬に乗ってこそ成人男性だと認められるという考えがあったので、負傷した兵士の自尊心を高めるという意味でも効果は高かったと思われる。20世紀初頭、イギリスの病院で患者の治療に「乗馬療法」が用いられ、その後、欧米を中心に「障がい者乗馬」として世界各地に広まっていった。日本では、ドイツより1970年に始めて「障がい者乗馬」が紹介され、1984年に始めて組織として「日本障がい者乗馬連盟（現在の日本障がい者乗馬協会）」が設立された。その後、日本各地で「障がい者乗馬」が行われている。しかし、北海道では、馬産地という地域性がありながら、「障がい者乗馬」を実践している例は少ない。

札幌には、イギリスのRDA（Riding for the Disabled Association）の資格を取得しているインストラクターがレッスンを行っている「乗馬セラピー倶楽部」がある。また、2015年に北海道白老町で、「日本障がい者乗馬協会（JRDA）」が認定する資格を取得したインストラクターにより、レッスンが展開されている「ホースセラピーペガサス」が開設されるなど、北海道でもその取り組みは広がってきている。「障がい者乗馬」は、様々な障がいに対応することができると言われており、一人ひとりの障がいの状態に合ったレッスンが行われている。

1) 視覚障がい

日本での、視覚障がい者に対する事例は極めて少ない。JRDAの東京支部に当たる「東京障がい者乗馬協会」では、視覚障がい者に「障がい者乗馬」を行っていた。レッスンの方法は、馬場の各ポイントにアルファベットのマークがあり、インストラクターが声で誘導する。騎乗者は、その誘導により馬場での位置を認識する。そのようなレッスンを繰り返していくことで、騎乗者は、自分の位置を正確に認識することが可能になる。実際に、馬をコントロールできるようになった全盲の人が「自分だけでは周りが見えていないため走ることができないが、馬に乗れば、馬を信じて走ることができる」と語っていたという記述があった（新井 2013²⁾）。道内

では、かつて北海道旭川盲学校で、障がい者福祉施設（エルム作業所）の乗馬施設を利用して、学習活動が行われていた（長谷川 1998）が、現在では実施されていない。

2) 聴覚障がい

RDAの記録（LOG BOOK FOR COACHES）では、聴覚障がい者を指導する方法が示されており、その場合、周囲の音環境（聴能レベルの最適化）を整えることが重要であると示されている。

すなわち、ヘルメットのサイズをぴったりと合わせ、補聴器の支障にならないようにしなければならない。また、ハウリングしていると、驚いた馬が突発的な行動を取る可能性も考えられるため、乗馬の前に必ず補聴器のフィッティングや調整を行う。インストラクターや周りのスタッフは、屋内では音響が悪いこと、逆光では読唇や表情が読み取りにくくなることなどを理解しておかなければならない。指導の際には、単語や短い言葉を使うようにし、シグナルは大きく単純なものを使用する。使用する馬は、大きな音を気にしないように訓練されている馬を選び、褒める際には、拍手や笑顔を用いて伝えることが大切である。

また、JRDAの記録では、盲ろうの人に対して指導した記録も報告されている。方法は、視覚や聴覚では、コミュニケーションが取れないため、サイドウォーカーによる背中へのタッピングなどの合図で、馬を動かしたり曲がったりなどを指導していた。

3) 知的障がい

身に危険を感じるようなスポーツは、「Risk exercise（冒険的な訓練）」と呼ばれており、それ以外のスポーツと比較して、より多くの身体的・心理的反応を引き起こし、乗馬はこれに当てはまる。知的障がい児は、触覚、痛覚の低反応、視覚の過剰反応などが見られると報告がある（山田・仮谷ら1997⁶⁾）。実際に「障がい者乗馬」を体験した知的障がい児に対し、「感覚入力反応検査」を実施し、乗馬実施の回数を重ねるごとに、乗馬前と乗馬後での変化が見られたと報告している（押野・篠原2002³⁾）。青木・河野ら（2002¹⁾）の報告では、騎乗中に、自らを落ち着かせるように言葉を発していた子どもが、技量を必要とする馬に騎乗の際には、無口になる様子が確認されている。すなわち、落ちることに対する危機感から、集中力が増していると思われる。小林（2000⁹⁾）の報告では、始め恐怖心や不安から、なかなか馬に近づかない子どもや、馬に乗ってすぐに泣き出してしまふ子どもが、馬場を1周、2周と回っていくうちに、馬に対する恐怖心が薄れ、馬に揺られる心地よさや

満足感を得ることができていた。また、馬に近づくことを拒絶していた子どもも、他の子どもが乗っている様子を見て、「自分も乗ってみたい」という心理に変容していく様子なども確認されている。乗馬は、大きな馬に乗ったという満足感や爽快感が得られ、上手に乗っていたと周りや親から褒めてもらうことによって自信が付き、そこからもう一度やりたいという意欲の高揚につながる。これらの全体の活動を通じて、やがて活動的な日常生活へと導かれていくことが期待できる。また、乗馬がもたらす親に対しての影響も少なくない。知的障がいは、健常者に比べてできることが限られている。そのため、最初から「できっこない」という先入観にとらわれがちになってしまう。しかし、馬は、我が子に対する養育親の見直しの機会を与えてくれる。乗馬後のアンケートからも、絶対にできないと思っていた我が子が、毅然とした態度で馬に乗っていたり、乗馬後の満足感あふれる表情を見ることで、「意外な一面を見ることができて驚いている」というような意見も多い。その経験から、できることを淡々とこなしていくのではなく、新しいことに挑戦させていこうという前進思考へと期待感が高まっていくことが考えられる。

4) 肢体不自由

アニマルセラピーの領域は、医療、教育、スポーツの三つの領域において行われているが、医学的な「乗馬療法」は、そのいずれの領域においても効果が認められている（小林 2000⁹⁾）。犬や猫が心理的効果に限定されているのに対して、馬を介した療養は、心身両面での効果が期待できる。すなわち、馬に乗る際に感じる「落ちたくない」という心理的な作用が、その効果に期待される大きな理由の一つでもある。身体に障がいがあると、普段、車椅子での移動やベッドの上で偏った姿勢をとりがちであるが、この姿勢の歪みが呼吸や内臓、筋肉や神経に負担を掛けてしまう。そのため、馬上でバランスのとれた姿勢を維持できるように指導が行われる。馬に乗って歩くと、身体が大きく揺れるため、自然と恐怖心を感じる。しかし、それと同時に、自分の体を最大限に生かして、馬の上でバランスを取ろうとする状態が自然とつくられる。この環境の中で、馬の前後・左右・上下の揺れが、頸椎（首の脊椎）や脳幹（呼吸や心臓の活動、体温調節など生命を維持するための中枢部分）を刺激し、機能回復や健康促進につながるといわれている。さらに、その揺れは適度な負荷となり、関節を柔軟にする効果もある。そのため、ポリオ小児麻痺、脳性麻痺、二分脊椎、筋ジストロフィー症などをもつ人に対して、有効であると認められている。

小島・江刺ら（2008⁸⁾）は、脳性麻痺児・者や精神運

動発達遅滞等の障がい者に対して、左右坐骨部の体圧を測定し、乗馬後の重心の左右の傾きに減少が見られたと報告している。2015年の五色ホースクラブによる講演会では、「16歳の筋ジストロフィーのある人の病気の進行が6年止まっている」という報告もあった。慶野・松本ら（2007⁶⁾は、50歳で右脳出血を起こし、左半身の運動・感覚機能がほとんど全廃し、失語症も併発した人が、毎週1時間の乗馬を2年間継続した結果、患側半身の随意運動機能などが回復し、失語症も軽減したと報告している。滝坂ら（2005¹²⁾は、国立特別支援教育総合研究所・肢体不自由教育研究部の研究において、各都道府県の特別支援学校での教育課程上の取り組みについて報告し、脳性麻痺があり筋緊張が強い状態の生徒には、乗馬後には排痰や排便が促される即効性が認められ、体幹を保持することが困難な生徒の場合、自ら姿勢を立て直そうとする動きが報告されている。これらの成果は、運動障がいの改善はもとより、日常生活の質（QOL）の向上も期待でき、やがて彼らへの生きる活力につながっていくと思われる。

5) 発達障がい・自閉症スペクトラム障がい

発達障がい等に対する「障がい者乗馬」の活動は、バランス感覚の改善、筋力強化、自信・達成感の獲得、人とのコミュニケーション能力の向上などが上げられる。特に、発達障がいのある人が最も苦手とするコミュニケーション能力の獲得や強化については、大きな効果が期待できる。馬に乗るためには、適切な合図をしなければコントロールすることはできず、決して一人で乗ることはできない。手綱の長さや脚での合図などがしっかりとできていなければ、馬は勝手に行動するため、インストラクターやたくさんのスタッフのサポートが必要である。インストラクターからの指示をしっかりと聞かなければ気持ちよく乗ることはできず、場合によっては危険な場面も起こりうるということを、乗馬の回数を重ねていくことで騎乗者は理解していく。つまり、馬に乗ることによって、自然と人の話を集中して聞かなければならない環境がつけられることになる。実際に、対人関係の改善、パニックの減少、集中力の強化、順番待ちの確立などの効果をもたらされてきていることがわかってきている。津田（1999¹⁴⁾の報告では、発達障がい児（言語発達遅滞のLD）を対象に発達領域別の効果測定を行い、乗馬を行った児童と行っていない児童を比較し、運動及び対動物意識に対して著しい効果があることが確認されている。慶野（2007⁶⁾は、自閉症であり、周りとのコミュニケーションを取ることが苦手であった児童が、乗馬を通して馬と関わる人達と目を合わせたり、しっかりとものを見る習慣がついてきたことを報告している。ま

た、慶野（2008⁷⁾は、他者に対し行動上の反応が確認されていなかった児童が、乗馬を2年間継続して行った結果、模倣行為が頻繁に観察されるようになった。このように、馬が乗馬を通じて様々な障がいがある人たちに対して、日常生活における変化を与えてくれる存在であることがわかった。それらは、障がい者が抱える悩みや疑問に対して応えてくれるものであり、今後の教育活動への動機づけとなったと考えられる。

Ⅲ. アンケート調査の結果と考察

1. 「乗馬体験活動」の実施について

滝坂ら（2003¹¹⁾により、現在の日本では、特別支援教育において乗馬を取り入れている事例は、少ないことがわかった。そこで、北海道の特別支援学校では、教育課程の中でどの程度「乗馬体験活動」を行っているかという現状を明らかにするために、全道の特別支援学校66校に対して、悉皆調査を行った。回収できたのが45校であり、全体の約7割（68.2%）で回収することができた。この内、回収できた学校の在籍児童生徒数は幼稚園から高等部まで合わせて、計3,438名であった（表1）。

調査内容については、別紙資料（附票参照）の通り、「Ⅰ乗馬体験活動の実施について」、「Ⅱ乗馬体験活動の内容について」、「Ⅲ乗馬体験活動の実施にあたっての意向について」の3項目について調査を実施した。

「乗馬体験活動」の有無に関する調査の結果、『1

表1 回収校の在籍児童生徒数（2015）

校種	幼稚園	小学部	中学部	高等部	合計
盲(2校)	10	26	20	58	114
聾(3校)	36	47	37	0	120
知(29校)	0	374	299	1832	2505
肢(8校)	2	221	159	212	594
病(3校)	0	24	37	44	105
合計	48	692	552	2146	3438

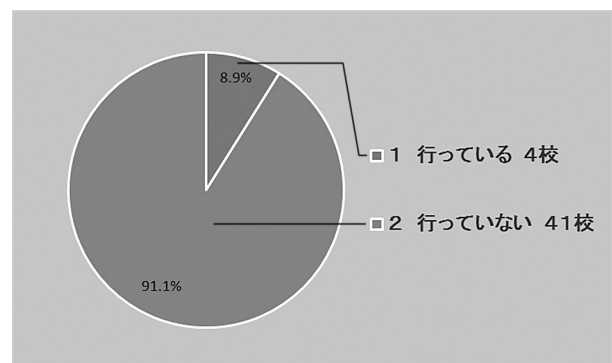


図1 乗馬体験活動の実施の有無

行っている』学校は、「北海道七飯養護学校」「北海道帯広養護学校」「北海道南幌養護学校」「北海道平取養護学校静内ペテカリの園分校」の4校(8.9%)であり、『2行っていない』学校が41校(91.1%)であった(図1)。

すなわち、北海道の特別支援学校においては、馬を用いた指導や馬に乗る機会を提供した教育活動は、ほとんど実施されておらず、日本有数の馬産地でありながら、十分に教育活動に生かされていない状況にあった。

2. 「乗馬体験活動」の内容について

(1)で『行っている』学校を対象に、その内容について調査を行った。調査内容は、1)どの学部・学年で実施しているかについて、2)どの教育課程で実践しているかについて、3)実施場所について、4)手引き・マニュアル等の有無について、5)年間を通した実施回数について、6)「乗馬体験活動」を通した児童生徒の変化について、7)「乗馬体験活動」を続けていくにあたっての課題について、7項目である。

1) どの学部・学年で実施しているかについて

表2 学部・学年での実施

学校名	学部・学年
北海道七飯養護学校	中学部3年
北海道南幌養護学校	中学部3年
北海道帯広養護学校	高等部1年
北海道平取養護学校 静内ペテカリの園分校	小学部1～6年、中学部1～3年、高等部1～3年

学部・学年での実施については、中学部3年から高等部1年での実施が最も多く、馬という大型哺乳動物への危険防止・安全指導の面から、小学部の低年齢の児童を実施対象から除いていると推定される。また、道内でも有数の馬産地に設置されている北海道平取養護学校静内ペテカリの園分校(以下「静内ペテカリの園分校」という)では、小学部1年から高等部3年までのどの学部・学年でも実施していた(表2)。

2) どの教育課程で実践しているかについて

表3 教育課程における位置づけ

学校名	教育課程
七飯養護学校	総合的な学習の時間
南幌養護学校	特別活動(見学旅行)
帯広養護学校	生活単元学習
静内ペテカリの園分校	総合的な学習の時間

教育課程における位置づけは、『総合的な学習の時間』が2校であったが、回答にバラつきがあり、同じ

「乗馬体験活動」でも、それぞれの特別支援学校によって教育課程上の取り扱いが異なっていることが伺える(表3)。

3) 実施場所について

表4 乗馬体験活動の実施場所

学校名	実施場所
七飯養護学校	・乗馬体験可能な施設
南幌養護学校	・乗馬体験可能な施設 ・牧場や農場
帯広養護学校	・乗馬体験可能な施設 ・その他(学校に来てもらい、学校近辺の道路で実施)
静内ペテカリの園分校	乗馬体験可能な施設

実施場所は、学内で実施しているという学校は皆無で、乗馬体験可能な施設での実施が最も多かった(表4)。

2)での調査も踏まえて、「乗馬体験活動」を教育課程の中で実践していくためには、学校に来てもらうという例外もあるが、基本的には学外での学習活動になり、実施するためには、実施場所への移動時間も含めて、授業時間の確保ができるような教育課程の編成の工夫が必要と思われる。

4) 手引き・マニュアル等の有無について

表5 手引き・指導マニュアル等の有無

学校名	手引き・指導マニュアル等の有無
七飯養護学校	ない
南幌養護学校	ない
帯広養護学校	ない
静内ペテカリの園分校	ある

「手引き・指導マニュアル等の有無について」は、『ある』と回答があったのが、静内ペテカリの園分校のみであった(表5)。その記載事項については、指導上の注意事項、安全面に対する配慮、馬に対する接し方という内容であった。すなわち、馬に対する接し方等から、教師自身も、児童生徒の乗馬体験と同じように関わるといった積極的な活動の様子が伺える。すなわち、静内農業高校(生産科学科)との交流及び共同学習の成果や馬の飼育施設との連携・協力が大きく影響している。

一方、『ない』と回答した学校では、馬に関する専門性のある教員が皆無であり、ほとんど馬の飼育施設に指導を委ねているものと考えられる。

5) 年間を通した実施回数について

表6 乗馬体験の年間を通した実施回数

学校名	実施回数
七 飯 養 護 学 校	1 回
南 幌 養 護 学 校	2 回
帯 広 養 護 学 校	2 回
静内ペテカリの園分校	小学部 2 回
	中学部 6 回
	高等部 4 回

年間の実施回数については、静内ペテカリの園分校の中学部の6回が最大であるが、いずれの学校でも1～2回程度しか行われていないことがわかる(表6)。本来、「障がい者乗馬」は、年間を通して継続して行っていかなければ、なかなか効果を期待することはできない。それに対して学校が行っている「乗馬体験活動」は、見学旅行などのレクリエーションの一環として取り組んでいる場合が多く、馬産地の学校(静内ペテカリの園分校)と大きな差異がある。

6) 「乗馬体験活動」を通した児童生徒の変化について

表7 乗馬体験活動を通した児童生徒の効果や変化

学校名	児童生徒の効果や変化
七 飯 養 護 学 校	①その他(1回の取り組みなので、感じる事が難しい)
南 幌 養 護 学 校	①身体機能の回復・改善・向上 ②対人関係の改善
帯 広 養 護 学 校	①情緒の安定 ②動物への愛護
静内ペテカリの園分校	①身体機能の回復・改善・向上 ②情緒の安定

乗馬体験活動の効果は、バラつきはあるが、『身体機能回復・改善・向上, 他者とのコミュニケーション能力の向上, 対人関係の改善』に効果があったという回答であった(表7)。しかし、5)での調査からもわかるように、年間を通した実施回数が少ないため、七飯養護学校の回答のように、実施回数が極めて少ない学校では、その効果や変化を実証・検証することが難しいのが現状のようである。

7) 「乗馬体験活動」を続けていくにあたっての課題について

表8 乗馬体験活動の継続における課題

学校名	課 題
七 飯 養 護 学 校	①経費・経済的負担 ②移動距離と移動手段
南 幌 養 護 学 校	①経費・経済的負担 ②移動距離と移動手段
帯 広 養 護 学 校	①指導者(教職員)の確保 ②馬への危険性(蹴り、落馬等)
静内ペテカリの園分校	①移動距離と移動手段

活動の継続性の課題は、移動距離と移動手段があげられた(表8)。ほとんどの場合、学外での活動が中心のため、乗馬時間に加えて、乗馬体験可能な場所までの移動時間を確保しなければならない。そのため、継続して実施していくことは困難であり、年間を通した実施回数が少ないことの最大要因として考えられる。しかし、帯広養護学校のように、学校に馬を連れてきてもらい、学内での活動が可能となれば、この課題は解決できる。

すなわち、馬事関係者との連携・協力など、どのような方法・内容があるかを模索・検討していくことが必要ではないと思われる。

3. 「乗馬体験活動」の実施にあたっての意向について

(1)で『行っていない』と回答のあった学校を対象に、1)「乗馬体験活動」が実施可能な教育課程, 2)「乗馬体験活動」が可能な施設等の有無, 3)「乗馬体験活動」を実施できない理由について3項目の調査を行った。

1) 「乗馬体験活動」が実施可能な教育課程について

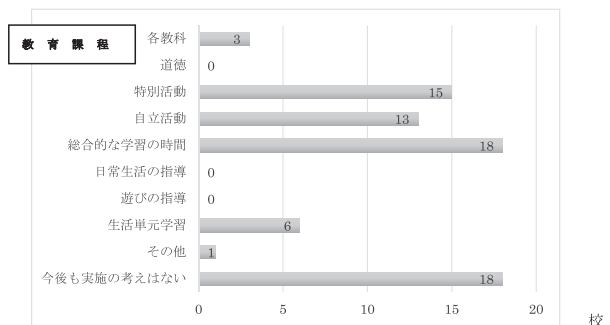


図2 「特別支援学校で乗馬体験活動が実施可能な教育課程」

この結果、最も多かったのは、『総合的な学習の時間』の18校及び『今後も実施の考えはない』の18校であった。「各教科」においては、『生活科』2校、『体育

科』1校であった。また、「その他」については、『校外体験学習』という回答であった(図2)。

『総合的な学習の時間』が多いことは、「乗馬体験活動」を通して、児童生徒が「生きる力」や問題解決する資質や能力の育成などに役立てられるのではないかと想定していることが伺える。また、『自立活動』も13校と高い比率を示している。すなわち、学習指導要領の自立活動の内容に示されている肢体不自由児などの「健康の保持」、「身体の動き」と密接な関係にあり、特に、運動・動作の改善やリハビリ効果が期待できると考えられていると思われる。また、『総合的な学習の時間』に次いで、『特別活動』も15校と高い比率を示しており、宿泊研修や見学旅行での体験活動に取り入れるなどの工夫が考えられる。しかし、学校行事のように、十分に授業時間を確保することができなければ、教育課程に位置づけて実施することは困難である。更に、『今後も実施の考えはない』という回答数も最も多かったことから、現行の特別支援学校の教育課程の編成では、実施は難しいと考えられている学校が多いことが伺える。

2) 学校周辺の「乗馬体験活動」が可能な施設の有無について

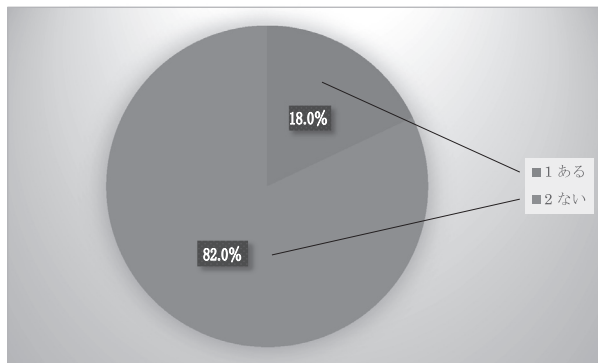


図3 学校周辺の乗馬体験活動が可能な施設等の有無

学校周辺の活動可能な施設の有無については、『ある』と回答した学校が7校(18.0%)、『ない』と回答した学校が32校(82.0%)であり、学校周辺では「乗馬体験活動」ができない学校が、全体の8割を占めている(図3)。また、『ある』と回答した学校を対象に、利用可能な場所について調査を行ったところ、『乗馬体験可能な施設』が4校、『牧場や農場』が3校、『その他』が2校であり、わずかながら利用可能な場所があることが判明した。『その他』については、『学校周辺に、乗馬体験が可能な場所がどこにあるか知らない』という回答もあり、情報不足や情報入手の課題も明らかになった。

3) 「乗馬体験活動」を実施できない理由について

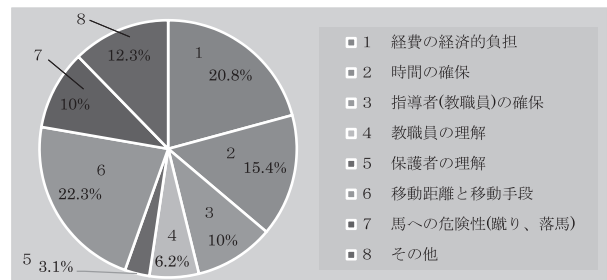


図4 特別支援学校で乗馬体験活動を実施できない理由

活動の実施できない理由について、『移動距離と移動手段』が29校(22.3%)であり、「乗馬体験活動」を実施している学校の課題としてあげられていた結果(p70, 表8)と一致した。次いで、『経費の経済的負担』の27校(20.8%)であり、どちらも全体の約20%ずつと同じ回答率を示しており、実施できない理由としては、大きい要因であることが明らかになった(図4)。また、『その他』での回答は、主に『必要性がない』、『児童生徒の実態上』、『近くに場所がない』の三つに分けられた(表9)。中でも、『必要性がない』という理由の回答が多く、「乗馬体験活動」を通しての教育的効果の予測がつかない学校も多いということがわかった。これらの課題を改善していく上で、共通して考えられることは、その活動の教育的効果について理解してもらう必要があるだろう。筆者らは、「障がい者乗馬」でのボランティア活動を通して、子どもたちが馬との関わりの中で、健やかに成長・発達していく過程を実践的に学ぶことができた。それらの実践の成果を、多くの人々、特に特別支

表9 特別支援学校で乗馬体験活動が実施できないその他の理由

必要性がない	<ul style="list-style-type: none"> ・教育活動として実施する必要がない。 ・アニマルセラピーを必要とする子どもが現時点ではない。 ・実施できないのではなく、本校の教育課程で現在必要ないため ・必要であれば実施は可能、「できない」ことはない。
児童生徒の実態上	<ul style="list-style-type: none"> ・病気入院中の児童生徒のため。 ・児童生徒の実態が知的障害と肢体不自由を併せ持っているため ・病状による、運動や外出の制限。
近くに場所がない	<ul style="list-style-type: none"> ・牧場は学校周辺にあるが、競走馬の育成を行っているので、乗馬を行ってくれる場所が近くにない。 ・乗馬ができる環境がない、活動を実施する明確な理由がないなど。 ・近隣にそのような対象施設もなく、実施の可否等についてもこれまで検討されたことがないため。

援教育に携わる教師に理解してもらうことが重要であると思われる。その方法は、文章や映像を通して伝えるだけでなく、実際に活動の場面・様子を見てもらうことが最良であると考えられる。そのためには、例えば、その活動の様子を見学しに来てもらう、もしくは、学校に馬を連れて行き、そこで体験してもらうという方法も考えられる。その環境を整えるためには、学校と施設や牧場等の連携に留まらず、市区町村の地方自治体や近隣の地域の人々と幅広い連携・協力と支援が必要である。馬を介した活動の良さを理解・啓発してもらう機会を増やしていくことが、これらの課題を総合的に解決していくことになるのではないかとと思われる。

IV. 「乗馬体験活動」及び「障がい者乗馬」の実践

1. 「北海道平取養護学校静内ペテカリの園分校（知的障がい）」での取り組み

北海道の新ひだか町にある「静内ペテカリの園分校」では、教育課程上に位置づけて、乗馬を実践している学校である。そのため、実際の活動の様子を視察し、インタビュー調査を実施した。

教育課程では、「総合的な学習の時間」において、小学部から高等部までの全ての学部・学年の児童生徒を対象に実践している。指導の目当てとして、「地域の教育資源を有効活用すること」と、「動物との触れ合いを通しての情操効果」の二点が上げられている。新ひだか町教育委員会がバスの送迎を含めて、経費のほとんどを補助しており、学校側は、無料で乗馬体験を実施することが可能となっている。実施場所は、同町内にある「ライディングヒルズ静内」で、約10年間継続して行われてきている。

その他、同じ新ひだか町内であり、全国で唯一の授業カリキュラムでサラブレッドの生産を取り入れている「北海道静内農業高等学校」との交流及び共同学習も行われている。

すなわち、通常の乗馬クラブでは、馬に乗るための技術についての指導は行いが、馬の「生態」について学ぶ時間を設けているところは少ない。しかし、この取り組みでは、乗馬を行うのみではなく、馬の体の仕組みや馬がとる様々な行動・しぐさの意味、馬装の仕方など様々なことについて、児童生徒が学ぶ機会を設けている。

乗馬方法は、馬を引く人（リーダー）、馬の横について歩く人（サイドウォーカー）の体制で行い、リーダーは施設職員、サイドウォーカーは学校の教師が勤めていた。

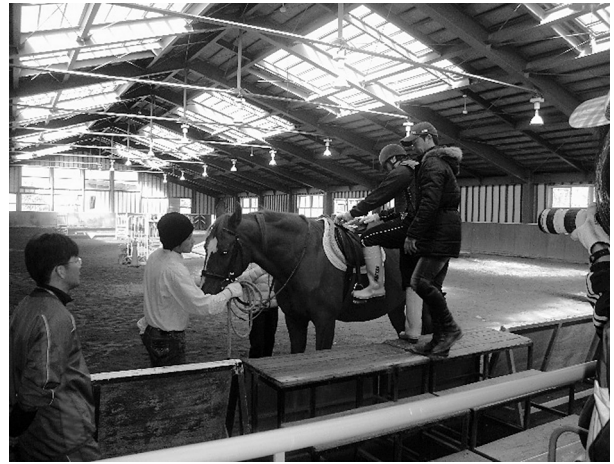


図5 馬に乗る時の様子（ライディングヒルズ静内にて）

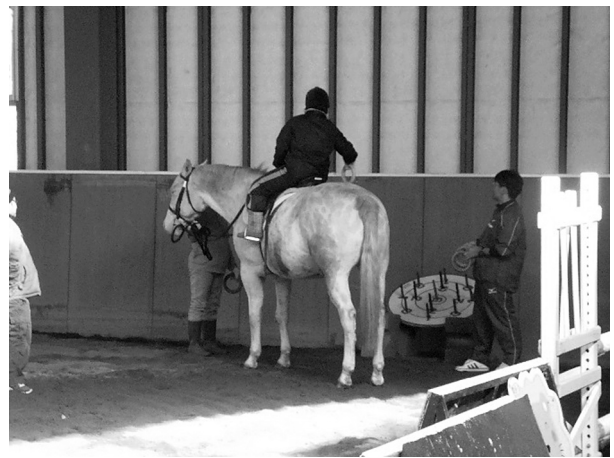


図6 輪投げの様子（ライディングヒルズ静内にて）

この方法は、「障がい者乗馬」の方法と非常に近い。基本的には引き馬での、「常歩」で手綱操作を行う。本時の指導では、馬に乗ったままボールをゴールへ投げ入れたり、輪投げも行ったりしている（図6）。馬上でボールや輪を投げるためには、しっかりと座位を保って乗っている必要があり、自然とバランス感覚が養われることになる。可能であれば軽速歩も行う。

騎乗後には、施設の指導者の説明を受け、馬のえさやりやブラッシングを行う（図7）。馬との関わりは、「障がい者乗馬」において、馬と人が互いを理解し合うために、極めて重要なものである。馬に直接触れることで、馬の体温の温かさを感じることができ、この関わりを繰り返していくことで、最初は大きい馬に対して恐怖心があっても、とてもおとなしくかわいらしい存在であると理解することができる。えさやりなどをする馬には、自分が乗った馬でなくても良いという指示があり、順番の関係上、全員ではなかったが、ほとんどの生徒が、自分が乗った馬に対して歩み出る行動が観察された。このことは、生徒たちが、馬に対して乗せてもらったことへの



図7 騎乗後のブラッシングの様子（ライディングヒルズ静内にて）

感謝の気持ちと、かわいらしさのコミュニケーション行動の表れであると思われる。

2. 「乗馬セラピー倶楽部」での「障がい者乗馬」の実践（肢体不自由児への試み）

北海道札幌市に「乗馬セラピー倶楽部」がある。ここでは、「イギリスのRDA（Riding for the Disabled Association）」の資格をもつインストラクターによる『一般乗馬』と『障がい者乗馬』の両方を実施している。RDAとは、「障がいをもつ人のための乗馬連盟」という意味である。イギリスに本部を置き、様々なハンディキャップをもつ人たちに乗馬の機会を提供している慈善団体であり、アン女王が総裁を務めている。

活動の目的は、障がいをもつ人たちにも、健常者と同じように乗馬を楽しむことを通して、健康や生活の質（QOL）の向上を図ることとし、1964年に結成されている。イギリスだけではなく、世界各地においてRDAの理念の下、活動が展開されており、日本においては、1998年にRDA Japanとして承認され、2004年にはNPO法人としての認証を受け、現在は、一般社団法人となっている。

「乗馬セラピー倶楽部」は、札幌市内で唯一イギリスRDAの資格をもつインストラクターによって、レッスンが展開されている。その理念は、RDAの理念の下に「どのような障がいをもつ人でも、馬と親しみ、馬をコントロールする楽しみを味わいながら、人間と馬がともに健康と幸福を得られるような活動をしていくこと」と「馬を扱う活動を通じて、障がい者が心身の自立性を高め、活動的な生活へと導かれていく手助けをすること」の二つが掲げられている。この二つの理念の下で、インストラクターが一人ひとりの障がいの状態にあったレッスン内容を考え、乗馬がうまくなるにつれて、そこから得られる自信や達成感から、日常生活への良い影響を与

えていくことが最大の目的として行っている。

今回、「乗馬セラピー倶楽部」で実施している障がい者乗馬の活動に、ボランティアとして関わることができ、その内容について報告・考察する。

「乗馬セラピー倶楽部」では、現在どのように運営・経営を成立させているのかについて、理事長の後藤氏にインタビュー調査を行った。

その結果、「乗馬セラピー倶楽部」は、活動当初、障がい者を対象としておらず、国土交通省の認可の下にあった「(社団法人)馬の道ネットワーク協会」という団体に属していた。北海道の良さを、馬に乗って野山を歩いてもらうなどの活動を通して、多くの人に周知・理解してもらうという宣伝・普及の目的の下に、活動が展開されていた。しかし、その社団法人が解散することとなり、施設・設備並びに馬や馬具をどうするかという運営上の問題が生じた。そこで、それらを引き取り、障がい者を対象とした「乗馬セラピー倶楽部」を2008年に設立し、今日まで約7年が経過している。

「乗馬セラピー倶楽部」では、現在、8頭の馬を飼育しており、最近新しく1頭が加わり、現在は9頭となっている。調査内容は、馬8頭の飼育時の運営経費についてである。

調査の結果、餌代、施設維持管理費、人件費など年間予算として約550万円を必要としている。これに対して年間の収入は、会員・ビジター費、外部での営業、助成金、寄附金などを合わせて約400万円であり、約150万円の赤字である。そのため、建物の老朽化が進み、馬の数も増えているが、施設や設備の改築や改装は厳しく、馬の世話やリーダー、サイドウォーカーなどの人手も多く必要であため、ボランティアに頼らざるを得ないのが現状である。

現在、9頭の馬を飼育しており、騎乗者の状態やレッスンの内容によって、毎回使用する馬を選別している。レッスンは、主に個人レッスンとグループレッスンに分けられ、どちらも必ずインストラクターの指示の下に行われる。個人レッスンは、大きく分けて、リーダーが引き馬をしながら、サイドウォーカーが横について行うリーディングと、丸形馬場内で行うやり方の2つに分けられる。乗馬を始めて間もない人が、馬の上で「立つ・座る」のリズムを取るためのトレーニングや、座位を一人で保つことが困難な人に、体幹や足・腰を鍛えるためのトレーニングを行う（肢体不自由児の指導実践例：図8・9）。

グループレッスンでは、ある程度、馬のリズムに合わせて「立つ・座る」、軽速歩ができるようになった人に対して行う。レッスン内容は様々であるが、主に手綱・足・座骨による馬への指示出しのトレーニングを行う。



図8 サイドウォーカー（乗馬セラピー倶楽部にて）



図11 棒の間へ誘導（乗馬セラピー倶楽部にて）



図9 個人レッスン（乗馬セラピー倶楽部にて）

始めのうちは、手綱に頼りがちになってしまうが、足を動かして指示を与えることが、馬にとってはストレスが少ないという考え方から、手綱のみに頼るのではなく、しっかりと足を使って馬をコントロールできることを目指している。軽速歩で行うことがほとんどであり、その中で、コーンの間をジグザクに進む（ペンディング）、円を描きながら乗る（輪乗り）、マークからマークへの



図10 輪乗り（乗馬セラピー倶楽部にて）

馬の誘導、棒の間を通るなど、できることを段階的に増やしていき、楽しみながら能力向上へと結びつけるようなレッスンが展開されている（図10・11）

V. おわりに

本研究は、「障がい者乗馬」と特別支援教育が相互に関わりをもつためにどのような在り方があるのかを考察したものである。「障がい者乗馬」の対象・方法・効果について、先行研究や実践事例の収集などにより、その実態を明らかにした。また、全道の特別支援学校において、「乗馬体験活動」を教育課程の中でどのように位置づけているのかについて、アンケート調査を行った。

「障がい者乗馬」は、様々な障がい者を対象に各地で展開されており、その活動を通じて、心身機能の改善・克服やコミュニケーション能力の獲得などの成果が上げられている。しかし、同時にとてもリスクのある活動であるということも明らかとなった。

すなわち、前述したとおり、馬は、絶対に安全な動物ではなく、人に危害を加える場合や落馬による事故の恐れなども考えられる。また、馬場の施設・設備の維持・管理及び馬の飼育にも多大な経費が掛かり、活動できる場所や施設も限られている。そのため、イギリスやアメリカでは、乗馬活動が医療リハビリテーションとして認められているのに対して、日本は、その危険性などから医療としては認められていないのが現状である。

アンケート調査結果からも、「乗馬体験活動」に掛かる経費や指導時間を確保することが難しく、実施するに至っていない特別支援学校がほとんどである。また、「乗馬体験活動」に対して、『必要性を感じていない』という回答も多数見られ、乗馬を通して得られる効果への理解が未だ普及していないことも明らかになった。しかし、「乗馬セラピー倶楽部」での関わりを通して、実

際に、子どもたちがその活動を体験する中で、成長・発達していく姿を見つめながら、身体運動の発達を促し、集中力の強化、情緒の安定、筋緊張の軽減など、日常生活へと結びついていくような効果が期待できる。すなわち、「障がい者乗馬」と特別支援学校が相互に関わりあえるような環境を築いていけるように、その活動内容や成果を理解してもらうことが、先決ではないかと思われる。そのためには、「乗馬体験活動」の機会を施設・団体等が積極的に学校側に提供していくことが必要と思われる。

本研究を通して、日本における「障がい者乗馬」の理解・啓発は、文章や映像による解説では、とても不十分であり、困難であると思われる。すなわち、日本での「乗馬体験活動」の施設・団体においては、馬に対する扱い方や使用している専門用語、調教の仕方などに統一性がなく、それぞれの牧場や乗馬クラブが独立して行っているところが多いからである。そのため、研修や指導の際に、誤解や正しい認識がなされていないことが考えられる。また、映像などの資料において、脳性麻痺など外見で変化が見られるような実態であれば、その医学的な効果は理解できるが、集中力が高まったことや自信・達成感を感じていることなどの情緒面の表出等の心理的な効果は、なかなか理解が難しい。「障がい者乗馬」の活動を正しく理解してもらうための最良の方法は、実際に活動の様子を見てもらう、あるいは体験してもらうことである。その中で、子どもたちの表情や集中して取り組んでいる様子を実際に見てもらうことで、それらの活動による効果の実感が得られ、大きく変化していくものと考えられる。また、その環境を整えていくためには、各市町村の自治体や周りの地域への理解・普及を図っていくことも重要である。未だ日本では、「障がい者乗馬」に対する理解が低く、活動に対する助成金などの資金援助も少ないため、それぞれの牧場や乗馬クラブなどでは、経費の掛かる馬を多く抱えながら、ボランティアに頼らざるを得ない状況である。そのため、学校と連携するまでには、経済的な運営・実施のための資金援助と人的資源の確保が求められる。これらの課題を取り除いていくことにより、「乗馬体験活動」を利用しやすい環境をつくることができ、相互に関わりあえる機会も得られ、特別支援教育への発展へとつながっていくことを期待したい。

最後に、本研究をまとめるにあたり、調査研究と実践研究に御協力を賜った（非営利活動法人）北海道障がい者乗馬センター 後藤良忠理事長並びに（学校法人 景盛学園）宮ノ丘幼稚園 三浦康暢園長、北海道平取養護学校 前川互前校長（現 新篠津高等養護学校校長）、静内ペテカリの園分校 平井孝和前教頭（現 釧路養護学校副

校長）に心から厚くお礼申し上げる。

引用文献

- (1) 青木 強他（2002） 障害者の乗馬療法. 感性福祉研究所年報(3) p235～254
- (2) 新井文吾（2013） 障害者乗馬：障害者乗馬の魅力と実際. 福祉介護テクノプラス 6(3) p10～13
- (3) 押野修司（2002） 知的障害児に対する乗馬療法の試み－感覚入力反応検査による評価－. 作業療法21 p308
- (4) 川添敏広他（2010） 障害者支援施設での乗馬療法(Ⅱ). 白鷗大学教育学部論集 4(1) p203～221
- (5) 慶野裕美他（2007） 馬と出会ったひろ君－乗馬を通じた六年間の取り組みを振り返って. 特別支援教育研究 (602) p50～57
- (6) 慶野裕美他（2007） 広汎性発達障害児における乗馬療育プログラムの検討. 小児の精神と神話47(3) p173～182
- (7) 慶野裕美他（2008） 広汎性発達障害児における「コミュニケーションとしての言語を促すための乗馬プログラム」の開発. 自閉症スペクトラム学会 7 p61～69
- (8) 小島愛子他（2008） 乗馬療法前後に関する坐圧変化の一考察. 日本理学療法学会大会 p631
- (9) 小林勝年（2000） 知的障害を持つ子ども達に対する乗馬療法の試み. 学校教育研究 p43～62
- (10) Colin Vogel（2005） HORSE CARE MANUAL. 株式会社インターズー（訳 鈴木 勝他：馬を飼うための完全ガイド）p32～65
- (11) 滝坂信一・笹本 健他（2003） 盲・聾・養護学校の教育活動における動物とのふれあい－全国調査結果にみる実態と展望－. 国立特殊教育総合研究所一般研究「障害のある子どもへの馬の特性を利用した指導に関する研究」報告書 p117～127
- (12) 滝坂信一（2005） 馬の特性を活かして障害のある人々の指導に挑戦する. 食農と環境 2 p48～50
- (13) 滝坂信一（2011） 馬をパートナーとした動物介在療法と大学教育（特集：馬の活用－乗馬の楽しみとホースセラピーに向けて）. 畜産の研究65(1) p9～14
- (14) 津田 望（1999） 発達障害児への乗馬療法の試み－乗馬療法の「効果測定チェックリスト」の開発とその効果性の検討（その1）. 日本聴能言語学会学術講演会予稿集25 p63
- (15) 長谷川 修（2006） 障害者乗馬の活用について. リハビリテーション(489) p22～30
- (16) 山田恭子他（1997） 精神遅滞児への感覚入力反

応. 作業療法16 p432-440

参考文献

- (1) 有路 真 (2009) 障害者乗馬活動に併用される馬のストレス負荷量の推定. 日本家畜管理学会誌・応用動物行動学会誌45(1)
- (2) 井上雄太 (2000) 乗馬療法のためのカラクリ乗馬シミュレータの開発. 日本バーチャルリアリティ学会大会論文集5
- (3) 井原正博 (2011) 障害者のための乗馬療法. 小児科52(13)
- (4) 井原昌代 (2011) 馬と障害者と医療. 畜産の研究65(1)
- (5) 印藤哲平 (2011) アメリカにおける障害者乗馬の取り組み. 畜産の研究65(1)
- (6) 金子明日香 (2010) グリーン・チムニーズにおける馬の活用. ヒトと動物の関係学会誌26
- (7) 川喜田健司 (2014) 馬事従来:カナダの障害者乗馬施設CARDの紹介. Hippophile(55)
- (8) 川添敏広他 (2009) 障害者支援施設での乗馬療法(I). 白鷗大学教育学部論集3(1)
- (9) 川添敏広他 (2011) 重度・最重度知的障害者に対する乗馬を介在した身体的効果の検討. ヤマザキ学園大学・ヤマザキ動物看護短期大学雑誌(1)
- (10) 菅野 岳 (2006) 乗馬療法機器使用によるバランス, 歩行能力への臨床的效果. 理学療法臨床・研究・教育13(1)
- (11) 局 博一 (2000) 障害者乗馬の世界(視点を変えて). 理学療法学27(6)
- (12) 慶野裕美 (2007) 乗馬することで著明な機能回復を引き起こした脳出血後遺症片麻痺患者. 障害者スポーツ科学5(1)
- (13) 慶野裕美他 (2010) 広汎性発達障害児における乗馬療育プログラムの評価. ヒポファイル(41)
- (14) 慶野裕美他 (2010) 広汎性発達障害児における乗馬療育活動実践による日常生活上の行動変化の検討. 発達障害研究32(2)
- (15) 慶野裕美他 (2011) 乗馬療法-広汎性発達障害児のための乗馬療法テクニッカー. 総合リハビリテーション39(9)
- (16) 慶野裕美 (2012) 発語の見られない広汎性発達障害児への言語コミュニケーション指導としての乗馬療法. 自閉症スペクトラム研究10
- (17) 小島愛子他 (2010) 乗馬療法の効用-右片麻痺者の理学療法への適用例-. 日本理学療法学会大会2009(0)
- (18) 小林勝年 (1998) 知的障害を持った子ども達への乗馬療法の試み. 日本教育心理学会総会発表論文集(40)
- (19) 小林勝年 (1999) 乗馬療法がもたらした母子関係の変容課程. 日本教育心理学会総会発表論文集(41)
- (20) 橋本幸治 (2000) カラクリ技術を用いた乗馬シミュレーターによる乗馬療法の効果の検証. 日本バーチャルリアリティ学会第5回大会論文集
- (21) 長谷川康弘 (1998) 旭川市における障害者の乗馬~旭川アルム作業所の乗馬活動をして障害者障害者は何を得たか~. 情緒障害教育研究紀要 第18号
- (22) 長谷川良子他 (2003) MTシステムを用いた障害者乗馬の効果測定. 品質工学11(5)
- (23) 真並恭介 (2013) アニマルセラピー探求記⑦ホースセラピー(乗馬療法)-馬を飼育して地域につながる. Journal of clinical daily treatment for small animals 9(11)
- (24) 真並恭介 (2013) アニマルセラピー探求記⑥ホースセラピー(乗馬療法)-馬の広い背中は療育の場-. Journal of clinical daily treatment for small animals 9(10)
- (25) 松浦晶央 (2005) ウマの体格および騎乗者の振動とRDAインストラクターによる障害者用乗馬としての評価との関係. 日本畜産管理学会誌・応用動物行動学会誌41(1)
- (26) 山田弘司他 (2013) 騎乗方法の違いが騎乗者と馬の運動特性と疲労に及ぼす影響. 日本畜産管理学会誌・応用動物行動学会誌49(1)
- (27) 丸山麻美 (2006) 乗馬シミュレータ「ジョウバ」の立位バランスへの影響. 日本理学療法学会大会
- (28) 三木則夫 (2011) 一般社団法人:日本障害者乗馬協会のあゆみ. 畜産の研究65(1)
- (29) 美和千尋他 (2005) 自閉症児における乗馬活動による症状改善と乗馬習得過程-1自閉症児を通して-. 作業療法24(3)
- (30) 美和千尋 (2010) 広汎性発達障害児の行動面における乗馬活動の影響. 作業療法29(3)
- (31) 山本佳代子他 (2005) 我が国における乗馬療法(障害者乗馬)についての研究動向. 西南女学院大学紀要Vol. 9, P66-71

アンケート資料

北海道の特別支援学校における「乗馬体験活動」の教育的活用に関するアンケート調査用紙

1. 在籍幼児、児童生徒数 平成26年 5月1日現在

種別	盲・聾・知的・肢体・病弱	学校名				
在籍幼児、児童生徒数	幼稚部	男子	名	女子	名	計 名
	小学部	男子	名	女子	名	計 名
	中学部	男子	名	女子	名	計 名
	高等部	男子	名	女子	名	計 名

◎記入にあたって

- 各質問の項目にあてはまる数字に○印を記入してください。
- その他の記述欄には、具体的に箇条書きで記入してください。

「乗馬体験活動」とは：

「障がい者乗馬」と同意義ではあるが、心身機能の向上などのリハビリテーションへの活用のみならず、教育的に効果のある体験的な活動として仮定するものである。

5 乗馬体験活動を実施するにあたり、手引きや指導マニュアル等がありますか。

- ある 2 ない
- ある場合それは、どのような内容ですか。次の中から選択して、○を記入してください。(複数回答可)
- 指導上の注意事項 2 安全面に対する配慮 3 馬に対する接し方
 - その他()

6 年間を通して何回くらい実施してしますか。
(不確定の場合は、おおよその回数で構いません。)

()回

7 乗馬体験活動を通じて幼児、児童生徒の効果や変化はありましたか。次の中から選択して、○を記入してください。(複数回答可)

- 身体機能の向上・改善・回復 2 情緒の安定
- コミュニケーションの改善(言語機能) 4 対人関係の改善
- 動物への愛護 6 日常生活の改善 7 その他()

8 これからも乗馬体験活動を続けていくにあたってどのような課題があると思いますか。次の中から選択して、○を記入してください。(複数回答可)

- 経費の経済的負担 2 時間の確保 3 指導者(教職員)の確保
- 教職員の理解 5 保護者の理解 6 移動距離と移動手段
- 馬への危険性(蹴り、落馬等)
- その他()

アンケートにご協力いただきありがとうございました。

北海道の特別支援学校における乗馬体験活動の教育的活用に関するアンケート調査

I 乗馬体験活動の実施について

1 貴校の教育課程の中で、乗馬体験活動を行っていますか。
(年間を通して1回でも行っている場合は、1に○をつけてください。)

- 行っている 2 行っていない

※1と答えた場合は下記のIIへ、2と答えた場合は6ページのIIIへお進みください。

II 乗馬体験活動の内容について

2 どの学部、学年で実施していますか。(実施している学年にも○をしてください。複数学部、学年の場合は、複数回答可)

- 幼稚部
- 小学部 (1年 2年 3年 4年 5年 6年)
- 中学部 (1年 2年 3年)
- 高等部 (1年 2年 3年)

3 どの教育課程のどの指導内容で実践していますか。次の中から選択して、○を記入してください。(複数回答可)

- 各教科 教科名() 2 道徳
- 特別活動 行事内容() 4 自立活動 5 総合的な学習の時間
- 日常生活の指導 7 遊びの指導 8 生活単元学習
- その他()

4 どこで実施していますか。次の中から選択して、○を記入してください。(複数回答可)

- 学内 2 乗馬体験可能な施設 3 牧場や農場
- その他()

III 乗馬体験活動の実施にあたっての意向について

9 乗馬体験活動を教育課程の中に取り入れるとした場合、可能だと思うものに○を記入してください。(複数回答可)

- 各教科→ 教科名() 2 道徳
- 特別活動→ 行事内容() 4 自立活動 5 総合的な学習の時間
- 日常生活の指導 7 遊びの指導 8 生活単元学習
- その他()
- 10 今後も実施の考えはない

10 乗馬体験活動が可能な環境は、学校の周辺にありますか。

- ある 2 ない
- あると答えた場合どのような場所かお答えください。
- 乗馬体験可能な施設 2 牧場や農場 3 その他()

11 乗馬体験活動を実施できない理由をどのようにお考えですか。次の中から選択して、○を記入してください。(複数回答可)

- 経費の経済的負担 2 時間の確保 3 指導者(教職員)の確保
- 教職員の理解 5 保護者の理解 6 移動距離と移動手段
- 馬への危険性(蹴り、落馬等)
- その他()

アンケートにご協力いただきありがとうございました。

Study about utilization of person with disabilities horse-back riding in special needs education in Hokkaido

– About practice of intellectual disabilities education and physically handicapped education. –

Yūto Aoki¹⁾, Eizi Kanda²⁾

1) (Keisei-gakuen of incorporated school) Kindergarten of Miyanoooka in Sapporo city

2) School of Education and Culture, Hokusho University

Abstract

Its reality was made clear about the “person with disabilities horseback riding” developed at a various part of Japan at present by this research. We did an actual condition survey of how “horseback riding experience activity” is being conducted in the inside of a curriculum in special support school in Hokkaido and did the exercise for “special support education’s” and “person with disabilities horseback riding’s” being concerned, clearly, and what kind of state there is to have concerning mutually was considered and it was examined.

Key word : special needs education, person with disabilities horse-back riding, horse-back riding experience activities, horse-back riding education